

慶應義塾大学経済学部附属経済研究所 経済史ワークショップ<sup>°</sup>  
古田和子・太田淳編『アジア経済史』(上下、岩波書店、2024-25年) 書評会  
2025年12月20日

報告要旨

「経済学部でアジア経済史をどう教えるか?——テキストとしての『アジア経済史』」

加島潤 (慶應義塾大学)

本報告は、古田和子・太田淳編『アジア経済史』(上下、岩波書店、2024-2025年)を題材に、大学の経済学部においてアジア経済史をどのように教えるべきかという問題について論じる。日本のいくつかの大学の経済学部には「アジア経済史」という科目が設置されているが、本書序章の冒頭において、「本書は、東アジア、東南アジア、南アジアを対象とした『アジア経済史』の初めての教科書である」と述べられているように、東アジア、東南アジア、南アジアそれぞれを扱う概説書はあっても、これらの地域全体をカバーするテキストは、これまでほぼ存在しなかった。このことは、主にはアジアと呼ばれる地域の広大さと多様性に起因するものと思われるが、そうであれば、本書はどのような視点にもとづいて広大かつ多様なアジアの経済史を一つのテキストとしてとりまとめたのであろうか。

報告者は、中国近現代経済史を専門とし、経済学部でアジア経済史に関連する科目を担当する者であるが、学部教育においてアジアの経済史を教えることの難しさを日々感じている。それは、単に学部教育の限られた時間数のなかで豊富な内容を持つアジアの経済史を十全に教えることが難しいというだけではなく、必ずしもアジア経済史を専門に学ぼうとしているわけではない経済学部の学生にアジア経済史を学ぶことの意義をいかに伝えるかという問題でもある。本報告は、こうした経済学部でのアジア経済史教育の実践の観点から、本書のアジア経済史のテキストとしての特徴、特にその全体を通底する視点を考察し、本書をどのように大学の学部教育において活用することができるのかという点について論じたい。それを踏まえて、アジア経済史およびアジア経済史教育の在り方について執筆者・参加者と広く議論することを目的とする。